

天佑なり (上・下)

(高橋是清・百年前の日本国債)

著書 幸田 真音

それは、未明からの激しい雨も止み、秋の訪れを感じさせる晴れた日の正午少し前のこと。

正確には大正12年9月1日土曜日、組閣の大命を受けた山本権兵衛が、是清に再度の蔵相就任の可能性を模索していたころのことだ。

最初の揺れは、午前11時58分44秒。どこの家でも午餐の支度を終えたころ、あるいはちょうど食卓についたところだろうか。

突然、地の底で得体の知れないなにかが吼えるような、気味の悪い地鳴りがした。

次の瞬間、声をあげる間もなく、大地がのたうつように上下に波打ち始めた。神奈川県相模湾の北西沖を震源とするマグニチュード7.9の大地震、いわゆる関東大震災の発生だった。

人々を恐怖の奈落到突き落としたまま、揺れはすぐにはおさまる気配もなく、崩れ落ちた家々から、ほとんど同時に火の手があがった。

噴き上がる焔は、東京の下町の隅々までをその残酷な舌で舐め尽し、3日目に激しい雨が降るまでの丸2日間、昼夜を問わず燃え続けた。

このころの東京府の人口が400万人ほどだったなか、死者や行方不明者は10万人をゆうに超えた。日清戦争での死者が約1万3千人、日露戦争が約8万4千人だから、この震災の犠牲者がいかに多かったかが窺える。東京市内で収容された約7万4千体のなかで、3万9千余は、男女の区別さえつかない状態だった。

火災は、東京市内の総面積の46パーセント、横浜市内の28パーセントにまで及び、国民総生産の3分の1を超える55億円といわれる未曾有の被害をもたらしたのである。

翌9月2日、あたり一面、黒々として焦げ臭い瓦礫と化し、どこまでも続く平坦な地面。いまだ火災の勢いがおさまる気配もない帝都の空の下で、第二次山本権兵衛内閣が発足する。

新政権が真っ先に取り組まなければならぬのは、震災の善後策と復興に向けての対策だった。

この国難の時期、初めての入閣で大蔵大臣になったのは54歳の井上準之助で、彼は当初、震災被害を百億円と見積もった。

正規の調査機関でも101億円との数字を出してきたらしいのだが、なんにせよ、想像を絶する甚大な被害との印象を彼らが抱いたとしても無理ないことだろう。

井上がまず踏み切ったのは支払猶予、いわゆるモラトリアムで、直後の9月7日に公布

した。続いて27日には、手形について2年間の猶予期間を認め、さらに1億円の政府保証をつけたうえで、日銀が手形の再割り引きに応ずるという緊急勅令も発表した。

この再割りの総額は、結果的には4億3千万円という膨大な規模にまで膨らみ、のちの整理吸収に苦慮するだけでなく、やがては昭和初期の金融恐慌につながる要因ともなっていく。

前日の18日には、近江銀行だけでなく、台湾銀行東京支店で、さらには台湾内地における台湾銀行支店の取り付け騒ぎも報告されていた。

こののち、取り付け騒ぎが頂点に達する4月21日には十五銀行において非常貸出しが実施され、日銀に貯蔵されていた兌換券はほとんど空っぽに、日銀券の発行額は、金融恐慌発生直前の3月14日が10億8千8百万円だったのに較べると、4月20日は16億7千9百万円、ピークの4月25日にはなんと26億6千9百万円を記録することになる。株価暴落により取引所の立ち会いは停止となり、ついに37行もの銀行が休業に追い込まれるのだ。

ともかくにも事態の收拾は急を要する。しかもこれだけの難局である。乗り越えられる人材は他にない。

「ぜひとも、大蔵大臣をお引き受け願いたい」

田中は後継首班の大命を受けると真っ先に、逸る気持ちを抑え、その足で是清の私邸を訪れた。二度も三度も赤坂表町に通い、手をつかばかりの必死な形相で懇願したのである。

「しかし……」

是清はこのときすでに72歳。体調が思わしくないことを理由に一旦は辞退した。

だが、どうしても気になって仕方がない。金融界の危機状況が手に取るようにわかり、海外に向けての国の信用失墜が心配されるだけに、放ってはおけぬのだ。ましてや田中は、是清のあとを継いで政友会総裁に就いた男である。

「事態が収まるまでのあいだ、そうだな、おそらく3、40日というところだろうが、その間だけの大臣でいいのなら」

高橋是清、4度目の蔵相就任である。

かくして4月20日、田中が率いる政友会内閣は午後6時30分親任式を終え、早々に初閣議を開く。

客観的に俯瞰してみると、今回の一連の出来事は金融恐慌というよりも、社会不安による国民の心理的なパニックの結果である。

是清が期限を切って蔵相就任を受けたのは、そのあたりの感触を得ていたからだった。

長い一日を終え、閣議のあと帰宅したときはすでに夜の9時をまわっていたが、もはや一刻を争う事態だ。是清は大蔵次官の田昌や、日銀総裁の市来乙彦、副総裁の土方久徴らを呼んで、十五銀行の救済策に取りかかる。

十五銀行は宮内省の金庫。華族銀行とも呼ばれ、川崎造船、国際汽船、東京瓦斯電気工業といった巨大企業の資金が集中していた。代表者は松方正義の長男巖で、19日の時点からすでに取り付け騒ぎが始まっていたという。

20日の深夜、正確にいうと21日の午前2時半に十五銀行の休業が決まると、噂はすぐに広がった。底なしの不安に駆られた日本中の預金者たちが、都市といわず、地方といわず、通帳と印鑑を握りしめ、朝になるのを待ちかねて、怒濤のごとく各地の銀行に殺到する。

金融恐慌の最大の波が迫っていた。

だが、是清の対応は素早かった。72歳とは思えぬ回転の速さと、行動力である。

早朝からの閣議を経て、この日の午前11時には、21日付の全国的な支払猶予令^{モラトリアム}を取り決め、臨時議会の召集もかける。

続いて枢密院議長倉富三郎に緊急勅令速決の準備を依頼するが、勅令の発布は枢密院を経なければならず、どれだけ急いでも23日まで待たねばならない。では、その2日間をどうやって乗り切るか。

是清は、財界の双壁ともいべき三井銀行の池田成彬と三菱銀行取締役会長串田万蔵を呼びつけた。問題の2日間は、混乱を避けるため、民間銀行に自主的な休業を要請したのである。

「損失についての政府補償は?」

「それはすでに政府案をまとめてある。いま法文を練っている最中だ」

答えながら、ふと感慨深い思いにとらわれた。串田万蔵といえば、少年のころ学問など不要だと父に言われ、丁稚奉公させられていたところを是清が才能を見出したのだ。その後共立学校に入れ、亜米利加^{アメリカ}留学にも連れていった。人の縁の不思議をまたも感じずにはいられない。

その日、4月21日の日銀による「非常貸出」は1日で6億円余と平時の約7倍に達した。全体の貸出総額も16億6千4百万円、一般会計の歳出総額に匹敵する額だったというから混乱がいかに凄まじかったかを物語っている。

枢密院議長倉富に迅速な議事進行を頼み込んでから、是清が帰宅したときは、すでに日付も変わって22日の午前2時を過ぎていた。

わずかな睡眠で午前5時には起床。8時には出勤したが、総理の田中が発熱で療養が必要とのこと。午前9時には総理大臣代理として赤坂離宮に参内した。モラトリアム^{モラトリアム}がやむを得ぬことを上奏し、御裁可を仰いだところ、天皇は枢密院に諮詢。正午前の精査委員会を経て、午後2時半には可決を見る。是清の頭のなかで組み立てていたよりも丸1日早い進行だ。

だが、これだけではまだ気は抜けない。

22、23日の2日間は、串田らの素早い対応により、全国の銀行が休業を決めてくれた。24日は日曜なので3連休となる。およそ自然災害か紛争でもない限り、全国の銀行

が3日も店を閉めることなど世界でも例がない。

だからこそ、明けた25日になにが起きるか予測がつかなかった。是清は、すでにそれを見越した対応に取りかかっていたのである。

休みのあいだも、各銀行の内部では着々と準備が進められていた。とくに日銀では昼夜を問わぬ対応だった。日曜でも「非常貸出」は続行することとし、横浜正金銀行を通して海外支店でも対応できるよう潤沢な資金を準備した。

考え得ることはすべてやり尽した。

だが、結果は蓋を開けてみなければわからない。3連休が明けて、また21日と同じあの恐怖の再現となったなら、そのときは全責任を取らねばならぬ。

財界と内閣の運命を決める25日の朝、是清は、銀行が開く時刻と同時に飛び出して行った大蔵大臣秘書官上塚司の帰りを待っていた。

「普段どおりです、大臣。どこも整然として、騒ぎはまったく起きていません！」

転がるような勢いで駆け戻ってきた上塚が、泣き笑いの顔で報告する。各行の店頭にはこれ見よがしに札束が積み上げられ、どんなに預金者が殺到し取り付け騒ぎが起きても日本の銀行はビクともしないと、威勢を誇っていたと。